



令和6年(2024年)2月7日

特別公開「雛と雛道具」を開催します

このたび、彦根城博物館において、みだしの展覧会を開催いたしますのでお知らせします。

記

1 展覧会名称

特別公開「雛と雛道具」

2 会 期

令和6年(2024年)2月17日(土)～3月17日(日) 会期中無休

開館時間：午前8時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）

3 会 場

彦根城博物館 展示室1

4 展示の趣旨

3月3日の上巳じょうしの節句に行われる雛祭りは、女兒の健やかな成長を祈る行事です。元来、上巳に限らず、節句は季節の変わり目にあたるため、病気などの災いが降りかかりやすい日と考えられてきました。そのため、節句には厄やくを払う祈りをし、厄を受ける身代わりとして人形ひとがたを作り、神に供えたり、厄払いとして川や海に流すということが行われました。後にこの人形は、飾り付けて楽しむものへと変化していきました。江戸時代に入ると、桃の節句に、人形とともに菱餅や菓子、白酒などを供えて賑やかな飾り付けをして祭りをを行うという、現代につながる習わしが定着しました。この人形は雛と呼ばれ、より華やかで精巧なものが作られるようになります。そして、実際の調度類を模したミニチュアの雛道具も作られ、雛と共に飾られるようになりました。

江戸時代の大家の姫君の婚礼の際には、嫁入道具として、豪華な調度とともに雛と雛道具が誂あつらえられました。雛道具は、婚礼調度を模し、数十件にも及ぶ大揃いのものとするのが通例でした。井伊家なのおすけ13代直弼やちよの息女弥千代あんせい(1846～1927)が、安政5年(1858)に高松藩松平家世子頼聡たかまつはんまつだいら けせい しよりとし(1834～1903)に嫁いだ際にも、婚礼調度とともに雛道具が調えられました。弥千代の雛道具は、井伊家の家紋の橘たちばなと松竹梅の文様が金時絵きんときえであしらわ

れ、実物の調度さながらに精巧に作り込まれています。その数は85件にも及び、賑々しい婚礼仕度の様子を今に伝えてくれます。

本展では、弥千代の雛道具を中心に、地元の旧家に伝わる古今雛や段飾り、御殿飾りなどを一挙に公開します。春を彩る華やかな雛飾りの数々をご堪能ください。

5 展示作品

別添リストの12件

6 観覧料

一般 500円(450円)

小・中学生 250円(170円) ()内は30名以上の団体割引料金

*常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

スライドトーク

日時：令和6年(2024年)2月17日(土)

午後2時～(受付は午後1時30分～) *30分程度

会場：彦根城博物館 講堂

定員：50名(当日先着順)

参加費：無料 *展示室への入室には、別途、観覧料が必要です。

講師：奥田 晶子(当館学芸員)

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：奥田 晶子

(電話 0749-22-6100)

* 特別公開「雛と雛道具」展示作品リスト *

NO.	名称	数量	年代	所蔵
弥千代の雛と婚礼調度				
1	やちよ ひなどうぐ 弥千代の雛道具	85件	江戸時代後期	本館蔵(井伊家伝来資料)
2	やちよ かご 弥千代の駕籠	1棹	江戸時代後期	本館蔵(井伊家伝来資料)
旧家の雛				
3	こきんびな 古今雛	1対	昭和時代前期	本館蔵(加納基弘氏寄贈)
4	こきんびな 古今雛	1対	江戸時代末期	本館蔵(高崎正之氏寄贈)
5	こきんびな 古今雛	1対	江戸時代末期	本館蔵(森嶋美代子氏寄贈)
6	こきんびな 古今雛	1対	明治～大正時代	本館蔵(清水隆子氏寄贈)
7	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	昭和時代前期	本館蔵(青柳和子氏寄贈)
8	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	明治33年(1900年)	本館蔵(山本高嗣氏寄贈)
9	ひなごてんかざ 雛御殿飾り	1揃	昭和時代前期	本館蔵(山田米子氏寄贈)
10	まめにんぎょう 豆人形	1揃	大正～昭和時代	本館蔵(山田米子氏寄贈)
11	みつおりにんぎょう 三折人形	2軀	江戸時代後期	個人蔵
12	まめびな(つげたり ひなどうぐ) 豆雛(附 雛道具)	1揃	江戸時代末期	個人蔵

写真解説

1 弥千代の雛道具 85件 (写真はその一部) (作品リストNO.1)

江戸時代後期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

貝桶かいおけや三棚さんたな、挟箱はさみばこなど85件からなるミニチュアの調度類。弥千代の婚礼に際し、婚礼調度を模してあつち誂えられました。井伊家の家紋である橘紋たちばなもんと共に、根引きの小松、笹竹、梅枝うめがえの様子が描かれ、全体に統一感ある意匠となっています。



弥千代の雛道具のうち 駕籠・長柄傘

駕籠 高 31.5cm

長柄傘 高 45.0cm

弥千代の婚礼調度として伝わる駕籠かごと長柄傘ながえがさのミニチュアです。

駕籠は黒漆塗に豪華な金蒔絵きんまきえが施された女乗物おんなのりものと呼ばれるもので、高貴な女性専用の乗り物です。実物に比べると、横幅が狭いや縦長の形であり、大きさは約3分の1。随所に銀の飾金具が施され、内側には鮮やかな彩色で花鳥画が描かれています。

長柄傘は、日よけ、雨よけのために差し掛けるものです。

この展示では、実物の駕籠も展示します。実物と見比べることで、ミニチュアの精巧さをじっくりご覧いただくことができます。



2 弥千代の駕籠 1棹 (作品リストNO.2)

縦82.3cm 横112.2cm 高106.5cm

江戸時代後期

本館蔵 (井伊家伝来資料)

弥千代の婚礼調度として調えられた駕籠かごです。黒漆塗に井伊家の家紋の橘紋と、松平家の家紋の葵紋が、松竹梅の様とともに金蒔絵きんまきえで表わされています。随所に飾り金具が付けられ、内側には鮮やかな彩色で花鳥画が描かれています。



3 ^{こ きんびな}古今雛 1対 (作品リストNO.6)

男雛 高45.0cm 女雛 高50.5cm

明治～大正時代

本館蔵 (清水隆子氏寄贈資料)

男雛と女雛の一对。公家風の衣装をまとり内裏雛の一種で、江戸時代明和年間(1764～1772)に江戸の人形師原舟月が創始した古今雛と呼ばれるものです。造作は、細部までよく整えられており、目元や口元、髪の毛の生際などを描き出す柔らかな筆遣いは、制作者の確かな技量を感じさせます。



4 ^{ひな ごてんかざ}雛御殿飾り 1揃 (作品リストNO.8)

高 64.5cm

明治33年(1900年)

本館蔵 (山本高嗣氏寄贈)

紫宸殿を模した御殿の中に男雛と女雛、^{かんじょ}官女を、御殿の周りには^{ずいじん}隨身や^{しちょう}仕丁などを配した雛御殿飾りの一揃です。雛御殿飾りは、江戸時代の末頃から盛んに行われるようになり、明治時代には広く普及しました。

この御殿飾りは、明治33年(1900年)3月に生まれた千代という女性の初節句のために、京都で製作されたものです。御殿は大振り^{はつぜつぐ}りで、飾り金具をあしらった^{しとみど}葎戸や^{しちょう}房飾りの付いた^{みす}御簾など、細部まで丁寧に作り込まれています。明治期の雛飾りを今に伝える貴重な優品です。

